四、「ら抜き言葉」は正すべきか

さて、今回の国語審議会の答申は「ら抜き言葉」を「言葉の乱れやゆれの問題」と表現している。「言葉の乱れ」や「言葉のゆれ」との定義もけっして明確ではなくその区別は難しいが、おそらく許容出来る範囲のものを「ゆれ」とし、正すべきものを「乱れ」と呼ぶこととして、それではこの「ら抜き言葉」をいずれと判定すべきなのだろうか。

一般に年齢の高い層ほど、また、学問としての国語、日本語に携わる立場にある人ほど、「ら抜き言葉」を批判する傾向が強い。若者の「ら抜き言葉」を耳障りに感じるのと言うのは年輩者に多いし、それを文法的にはこうだからこう言いなさいと言うのは国語学者や教育者である。人間は年齢とともに変革を避けたがるようになるものらしいし、ましてや自分が国語学、国語教育に関わる者なら一言言わずにはいられないのも事実だろう。丸谷才一氏等はその筆頭で、新版の「広辞苑」が「ら抜き言葉」を誤用としていないことをその書評で（「週刊朝日」平成四年一月三十一日号）強く批判しておられた。丸谷氏は現在でも歴史的仮名遣いを用いておられるように、国語本来の形を非常にたいせつにされる方だから、とりわけ問題意識を強くお持ちかとも思うが、国語学者一般の姿勢は、概ねこれに近いであろう。

しかし言葉はつねに時代とともに変化していくものである。「ら抜き言葉」の隆盛も日本社会の変革にともなう日本語の変化の一部であるに違いない。たとえこれを正すべき言葉の乱れと断定しても、歴史上言葉を規制しようとして規制し得たことはないだろう。本来「過去」の助動詞「た」を伴った場合、動詞はすべて連用形となる。「行く」の連用形は「行き」であり、「読む」の連用形は「読み」であるから、「行きた」「読みた」が正しい形であるのに、我々はこれを「行った」「読んだ」と言って憚らず、ましてやこれを国語の乱れと注意された記憶もない。

しかも「ら抜き言葉」の発生の要因を考えるとそこにはある種の合理性が見られることはすでに述べた。日本語はあいまいさや不合理の多い言語で、それが日本語の特性だという議論もあるだろうが、むしろ「ら抜き言葉」をそのあいまいさからの脱皮を目指した言葉の発展と捕らえることはできないだろうか。折しも世は国際化の時代である。日本語を学ぶ外国人も増えつつあるが、彼らにとって日本語の持つあいまいさは不合理に見え、同時に大きな負担でもあるだろう。助動詞「れる」「られる」の意味の識別が前後の文脈によるのみならず、形の上からも可能となれば多くの日本語学習者にとっても朗報であるに相違ない。もちろん「ら抜き言葉」はそれを理由、目的として生まれたものではないが、そういった意味あいからも「ら抜き言葉」に市民権を与える時が近づきつつあるのではないだろうか。

一般科目

平成五年八月二十六日受理

［主要参考文献］

「現代国語をめぐる諸問題について」　第十九期国語審議会答申
「日本国語大辞典」　小学館
「助動詞」　北原美紗子　岩波講座「日本語7」所収
「日本語は乱れているか」　稲垣吉彦・井上史雄
雑誌「日本語」一九九三年三月号所収　他

合それは、

1．可能「思うことができる」
2．受身「他人にそのように認識される」
3．自発「そのように自然に感じる」
4．尊敬「（目上の人が）お思いになった」

の四種類のうちのいずれの意味なのか、形の上からはまったく区別ができない。もちろん日常の言語生活では、「どうも彼女にはあまりよく思われていないらしい」とか、「先生がそう思われるのも無理はありませんが・・・」とか、前後の文脈によって判断しているのだが、さりとてそれで完全に識別しきれるものでもなく、それが「受身」なのか「尊敬」なのか、はたまた「可能」なのか「自発」なのか、はっきりしないことや誤解を生むことがままあるのは、誰しも経験のあることだろう。こういったあいまいさや誤解を避けようとして、「尊敬」を表す場合にはできるだけ助動詞「れる」「られる」を用いず、特定の尊敬語があればそれを、なければ「お～～する」という表現を使用しようという運動があった。「お思いになる」、「お食べになる」、「お読みになる」という具合で、これなら確かに「尊敬」以外の意味には取り得ず、誤解を招くことはないだろう。

このように「お～～する」という表現を用いることにより、四つ意味のうち「尊敬」の場合は識別が容易にできるようになったわけだが、残る「可能」「自発」「受身」の識別があいまいなのは相変わらずである。そこで考えるのだが、現在の「ら抜き言葉」の隆盛にはこれらを形の上からも区別しようという意識が潜在しているのではないだろうか。繰り返すが動詞の未然形に助動詞「れる」「られる」の接続した形が「ら抜き」化するのは「れる」「られる」が「可能」の意味で用いられる時だけである。逆に言うなら、助動詞「れる」「られる」が「可能」の意味で用いられる時には必ず「ら抜き」化すれば、他の意味で用いられた場合と識別できることになる。そしてこれを前述の「尊敬」の場合に用いる「お～～する」と併用すれば、四つの意味のうち、「可能」と「尊敬」に関してはその意味を前後の文脈のみにたよることなく、形の上から判断できることになるではないか。

残る「受身」「自発」の場合はこれを表現する新たな方法がないが、実際には「れる」「られる」が「自発」を意味する用例は「思う」「偲ぶ」等、特定の動詞に接続した場合に限られていて特定しやすいし、それに、厳密な調査研究をしたわけではないので断定は避けるが、新しい世代は「自発」表現を失いつつあるように感じる。学生諸君の日常的な言語生活を見ていると、彼らは特に話し言葉のレベルではほとんど「自発」表現を用いていないように思う。そこで「自発」の用例をあまり用いられることのない特殊なものとして考えれば、「れる」「られる」を本来の形で用いるのは「受身」だけということになり、前述の「尊敬」の「お～～する」、「可能」の「ら抜き言葉」とともにその識別は極めて容易となろう。

以上のことを「食べる」を例にとって表にしたものを左に掲げることとする。

	従来の表現	新たな表現
1．受身	食べられる	食べられる（従来通り）
2．可能	〃	食べれる（ら抜き言葉）
3．自発	〃	／（特殊）
4．尊敬	〃	お食べになる（お～～になる） 召し上がる（尊敬語）

を挙げ、さらにこれを、それぞれ「たべれる」、「みれる」、「これる」と言うのがいわゆる「ら抜き言葉」であると述べた。そこでこれらの「ら抜き言葉」の成立を、五段動詞＋「れる」の場合と同様に、動詞未然形の活用語尾の最終音の母音と、それに接続する助動詞「られる」の「ら」の〝ra〟の子音の脱落として捕らえてみたらどうだろう。

たべられる（taber[ar]eru）
↓ たべれる（taberu）
みられる（mir[ar]eru）
↓ みれる（mireru）
こられる（kor[ar]eru）
↓ これる（koreru）

いずれも単に助動詞「られる」の「ら（ra）」が脱落したものと形の上では相違がないが、五段動詞と、同じ「可能」の助動詞「れる」との接続からの変化の過程から類推すれば、やはり動詞未然形の活用語尾の最終音の母音と、それに接続する助動詞「られる」の「ら」の〝ra〟の子音の脱落と考えるのが妥当であろう。

こうして考えてくると、「走れる」、「食べれる」、「見れる」等の表現を「ら抜き言葉」と称するのが適切ではないことが理解できよう。しかしだからと言って「ら抜き言葉」に代わるべき、「はしられる（hasirareru）」→「はしれる（hasireru）」の変化の過程を正しく表現するのに適切な呼称が考えられにくいのも事実なのだが、あたかも「ら」が抜けているかのごとき誤解を生むこの呼称は再考されてしかるべきであろう。ただし本稿は、これに代わる適切な呼称も今のところ見当たらないので、便宜上やむをえず「ら抜き言葉」という呼称を引き続き使用し、議論を進めることとする。

三、「ら抜き言葉」はなぜ生まれたか

さて、いわゆる「ら抜き言葉」の発生の過程は以上のごとく考えられるとして、順序は逆になってしまったが、次にどうして「ら抜き言葉」が発生し、かくも一般化したかを考えたい。一般には「ら抜き言葉」を国語の乱れとして批判も強いが、筆者はその発生には単なる国語の乱れとは言い捨てられない必要性があるようにも感じている。

「ら抜き言葉」発生の要因のひとつには、何と言ってもまず発音の容易さということがあろう。「起きられる」「食べられる」ではラ行の発音が一度に三つも、しかも立て続けに現れて言い辛いこと甚だしい。これを「起きれる」「食べれる」と表現すればずいぶん言いやすくなるし、あるいはまた、日本語は一単語あたりの拍数の多い言語だから、これを減らそうという意識も働いているかもしれない。

第二の要因として意味による使い分けの問題がある。周知の通り助動詞「れる」「られる」には「可能」「自発」「受身」「尊敬」の四つの意味があるが、このうちいわゆる「ら抜き」現象が起きるのは「可能」を意味する場合だけに限られる。筆者はこれにより、これまで発音上、表記上は区別できなかった助動詞「れる」「られる」の四つの意味の識別が可能になったのではないかと考えている。どういうことかと言うと、例えばただ単に「思われる」と言った場

これで見ると、それぞれ「まれ」が「め」に、「たれ」が「て」に変化しているのであって、けっして「ら」が抜けている状態ではない。即ちこれらの語に関しては、一般に用いられる可能の表現の言い廻しを「ら抜き言葉」と表現するのは、けっして適切ではないだろう。

同じ五段動詞でありながら「走る」では「ら」が抜け、「読む」、「打つ」では別の変化が起きるのはなぜなのだろうか。ここではまず、「読まれる」　↓　「読める」の変化の過程を考えてみることとする。

「よまれる（yomareru）」と「よめる（yomeru）」を比較すると、「よ（yo）」と「る（ru）」の部分に変化はなく、問題になりそうなのは〝mare〟の部分だけである。この部分が〝me〟と発音されているのだから、実際に脱落しているのは〝are〟、つまり「ま」の母音〝a〟と「れ」の子音〝r〟であると考えられる。

同様に「打たれる」　↓　「打てる」の変化の過程を考えてみよう。「うたれる（utareru）」と「うてる（uteru）」を比較すると、やはり「う（u）」と「る（ru）」の部分に変化はなく、問題は〝tare〟　↓　〝te〟の変化である。これまた「た」の母音〝a〟と「れ」の子音〝r〟が脱落していると考えて差し支えなさそうだ。こうしてみると、これらはすべて動詞未然形の活用語尾の最終音の母音と、それに接続する助動詞「れる」の〝re〟の子音が脱落、その結果、動詞未然形の活用語尾の最終音の子音と助動詞「れる」の〝re〟の母音が組み合わされて起きた変化だということが解る。

一方「走る」に可能の助動詞「れる」のついた場合、これが「はしられる」　↓　「はしれる」で、「ら」がそのまま脱落している理由を考えたい。実はこれもけっして「はしられる」の「ら」が直接脱落したものではなく、「よまれる」　↓　「よめる」、「うたれる」　↓　「うてる」とまったく同様の変化が起きているに過ぎない。即ち「はしられる（hasirareru）」から動詞「走る」の未然形「はしら」の最終音の母音〝a〟と助動詞「れる」の「れ」の子音〝r〟が脱落、残された「はしら」の「ら」の子音〝r〟に「れる」の「れ」の母音〝e〟が直接接続されて「はしれる」となったものである。脱落する部分を［　　］で示すと〝hasir［ar］eru〟となるのであって、〝hasi［ra］reru〟のではない。実に「走られる」　↓　「走れる」は、けっして「ら」が抜けているのではなく、たまたま「走る」がラ行の動詞で、残されるべき未然形「はしら」の最終音「ら」の子音と、脱落すべき助動詞「れる」の「れ」の子音が同じ〝r〟であったために、両者を取り違えた結果、あたかも「ら」が抜けているかのごとく思われたのである。

このように考えてくると、もう一方の可能の助動詞「られる」が下一段動詞、上一段動詞、及びカ行変格動詞に接続する場合も、当然同様ではないかと想像される。

先に可能の助動詞「られる」が下一段動詞、上一段動詞、及びカ行変格動詞に接続する例として

たべ（下一段動詞「食べる」の未然形）＋られる＝たべられる
み（上一段動詞「見る」の未然形）＋られる＝みられる
こ（カ行変格動詞「来る」の未然形）＋られる＝こられる

できるのは下一段動詞、上一段動詞、及びカ行変格動詞に限られる。

即ち、

たべ（下一段動詞「食べる」の未然形）＋られる＝たべられる

み（上一段動詞「見る」の未然形）＋られる＝みられる

こ（カ行変格動詞「来る」の未然形）＋られる＝こられる

そして問題となるいわゆる「ら抜き言葉」はこれらをそれぞれ「たべれる」、「みれる」、「これる」と言うのだから文法的に正しくない形になっており、そしてそれは文字通り「ら」が脱落しているかのごとき様相を呈する。

同じく「可能」の意味を添える助動詞に「れる」がある。「れる」と「られる」は意味、用法とも等しく同等に考えてよいが、接続に分担がある。つまり、「られる」が下一段動詞、上一段動詞、及びカ行変格動詞に接続したのに対し、「れる」はそれ以外の動詞、即ち五段動詞とサ行変格動詞に接続する。この場合にもいわゆる「ら抜き」のような現象が起きるものかどうか確認してみよう。ただし、サ行変格動詞「する」に「れる」のつく形、つまり「することができる」という意味の表現は、実際の言語生活では「する」＋「れる」という表現を採らず、「できる」という別の動詞を用いるのでここでは特に検討しないでおく。

また、五段動詞で「可能」を意味する形、「書ける」「走れる」「飲める」等を特に可能動詞と呼んで、本来の動詞とは別個のものとすることがあるが、筆者はこれには反対で、これらはすべて「ら抜き言葉」の一種だと考えている。逆に言えば「ら抜き言葉」は可能動詞の一種なのであって、これまで五段動詞に限られていたものが他の段の動詞にも派生して来たと考えてよい。故に「ら抜き言葉」の成立の過程を述べることは、そのままいわゆる可能動詞の成立を明らかにすることなので、以下、議論を続けることとする。

まず最初に、五段動詞「走る」に「可能」の助動詞「れる」の接続した形を考える。

はしら（五段動詞「走る」の未然形）＋れる＝はしられる

文法的に正しい形は「走られる」であるが、これと「走れる」と言う可能動詞的な言い方を問題にしているのだから、「はしられる」↓「はしれる」で、これまた「ら」がそのまま脱落した形に等しい。「ら抜き言葉」という表現はここまでのところ適切であると言える。

ところが同じ五段動詞でも「読む」や「打つ」に「れる」を接続させてみると、いささか問題が生じてくる。

よま（五段動詞「読む」の未然形）＋れる＝よまれる

うた（五段動詞「打つ」の未然形）＋れる＝うたれる

つまり、文法的に正しい形はそれぞれ「読まれる」、「打たれる」なのだが、これを問題とされる言い方（いわゆる可能動詞）、「読める」、「打てる」と比較してみよう。

「よまれる」　↓　「よめる」

「うたれる」　↓　「うてる」

いわゆる「ら抜き言葉」について

杉山　明

一．前言

一昨年（平成三年）九月に発足した第十九期国語審議会は、今年平成五年六月、今後審議すべき課題として十六項目を挙げ、「現代の国語をめぐる諸問題」と題する最終報告をまとめた。この十六項目中、第1番目に掲げられた「適切な言葉遣い」という項に「目的と場合に応じた適切な言葉遣いや文章表現の在り方，いわゆる言葉の乱れやゆれなどの問題，発音上の諸問題等について検討する必要がある」とある。ここで言う「いわゆる言葉の乱れやゆれなどの問題」の意味する範疇は相当広いものと考えられるが、審議会の発表によれば「見られる」を「見れる」、「食べられる」を「食べれる」とする、いわゆる「ら抜き言葉」の問題が含まれており、これを正すべき言葉の乱れとするのか、それとも許容できる範囲の言葉のゆれと考えるのか、今秋発足予定の第二十期国語審議会の判断を待つと言う。

「ら抜き言葉」の発生がいったいいつにさかのぼるものかは歴とした証明がなく判然としないが、筆者の知るかぎりではけっして特に新しいものではない。すでに小林多喜二の「蟹工船」（昭和四年刊）に「過労のためだんだん朝起きれ（起きられ）なくなった。」という一節があるくらいだから、大正末期から昭和初期にはかなり一般化していたものと考えられる。書き言葉にすでにあるくらいだから、平易な話し言葉ではもっと早く生まれ、用いられていたのかもしれない。ということは、発生以来少なくともすでに半世紀以上を経ていることになるのだが、これを特に取り上げて問題とする傾向はここ数年に著しいのも事実で、そういう意味では今回の国語審議会の答申がこの問題に言及した（まだ問題を提起したに過ぎないが）のも頷けないことではない。これは、ここ数年の間の「ら抜き言葉」の普及、蔓延ぶりが、特に甚だしいということなのであろうか。それとも一般社会における国語、特に話し言葉に対する関心の高まりを示すものなのだろうか。おそらく両方の要因が相乗的に影響しあってのことなのだろうが、それはともあれ、筆者もこの「ら抜き言葉」の問題に関して、自分なりの考察を加えつつ、その是非、功罪を考えてみたいと思う。

二．「ら抜き言葉」は「ら」が抜けているのか

一般に「見れる」、「食べれる」を「ら抜き言葉」と称するが、厳密な言い方をすればこれは正しい表現ではない。この点を説明するために、まず「見られる」、「食べられる」が正しく「見れる」、「食べれる」を不可とする文法的根拠を述べたい。これはわずかでも国語文法の知識のある者にとっては当然の話で、貴重な紙面を費やすに値しないかとも思うが、冒頭の問題を解説するために、敢えて確認しようとするものである。

いわゆる「ら抜き言葉」はすべて動詞の未然形に「可能」の意味を添える助動詞「られる」が付属したものだが、「られる」が接続